

大患難期の前に起きる事

第一部 オリーブ山での弟子たちへの教え

マタイ 24 章・25 章を中心として

文脈の確認

1. マタイ 23 章は、エルサレムの神殿において、群衆を前にしての教え
 - (1) その最後のことばは、(マタイ 23 : 38~39)

「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」
 - (2) 神殿について、イエスは、それまでは「父の家」と呼んでいた。ここでは、「あなたがたの家」と言い換えている。もはや、神殿は神の家ではなくなった。
 - (3) 『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とは、イスラエル民族がメシアを迎えるときのことばである。
 - ① イスラエル民族がイエスをメシアとして認め、天に帰られたイエスに向かって、このことばを叫び祈ると、イエスは地上に帰って来られる。これはイエスの再臨の条件である。
 - ② 歴史上くり返されるユダヤ人迫害の背後には、サタンがいる。ユダヤ人を地上から抹殺して、この祈りをすべき神の民を消滅させるなら、メシアの再臨が起きないからである。
 - (4) 23 章は、群衆を前にしての最後の教え。イエスの公生涯における預言者としての働きは、これをもって終わった。
2. イエスは神殿を去り、エルサレムを出て、その東にあるオリーブ山に座った。
3. そこで、弟子たちに「オリーブ山での弟子たちへの教え」を語った。
4. その内容は、**神殿の崩壊**の前兆、**この世の終わり**の前兆、**イエスの再臨**の前兆

5. 用語の確認

(1) この世

① この世=今の時代

- この世とは、「次の世」を前提にした用語
- 次の世、来るべき世=メシアの王国の時代

② この世の最後の期間は、7年間の大患難期

- メシアの王国が到来するための過渡期

(2) この世の終わり、その前兆

① この世の終わり= 7年間の大患難期 + 75日間の移行準備期間

② この世の終わりの前兆=大患難期の前触れとして起きること

(3) イエスの再臨（さいりん）、その前兆

① 再臨=イエスが地上に帰る=地上再臨は、大患難期の末に起きる

② 再臨の前兆=イエスの再臨の前触れとして起きること

(4) 携挙（けいきょ）

① イエスが空中まで迎えに来て、教会時代の信者たちが天に挙げられること

② 携挙の対象となる信者の範囲：紀元30年の五旬節の祭り（ペンテコステ）に教会が誕生して以降、携挙の時までに信者となった者たち

③ この信者たちには、2種類の信者たちがいる。

- 携挙の前までに死んで、その霊魂は天のパラダイスにいる信者たち
- 携挙のときに、地上で生きている信者たち

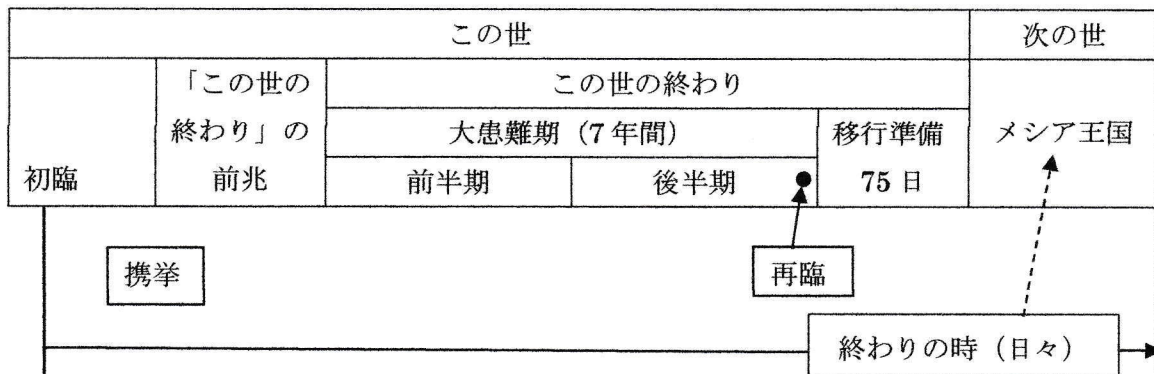
④ 肉体の死を経て天のパラダイスにいる信者たち

- 聖書では「主イエス・キリストにあって眠っている聖徒たち」と表現する。「眠っている」とは、体は動き回っていないが、霊魂は活動している状態を指す。
- 彼らのかつての体は、土（ちり）に帰っている。彼らの体であったりりは、携挙のときに、イエスの復活体とおなじ「栄光の体」に変えられる。
- その体に、天のパラダイスにいた霊魂が戻って、彼らは一瞬、地上に現れる。そしてすぐに天に引き上げられる。
- 一度死んで栄光の体を与えられることを、「復活」という。

⑤ 携挙のときに地上で生きている聖徒たち

- その体が一瞬のうちに栄光の体に変えられ、天に引き上げられる。
- 肉体の死を経ないで栄光の体に変えられることを「変換」という。

時の流れ



注意点が二つ

1. 携挙は、大患難期の前に起きる。しかし、直前である必要はない。携挙の条件は、「異邦人の完成のなる時まで」(ロマ 11:25)、すなわち【教会に属するように選ばれていた異邦人信者の数が満ちた時】である。その数は父なる神のみが知っておられるので、人間側の視点で表現するなら、携挙は【いつでも起こり得る】ということになる。使徒パウロがその書簡の中で、携挙を自分たちが生きている間にあるという前提で語っている(Ⅰテサ 4:15)のは、そのためである。
2. 「終わりの時」(ヘブル 1:2) という用語がある。これは、原語を直訳すると「終わりの日々」である。
 - (1) 旧約聖書の預言者たちがこの用語を使うときは、メシア到来後の時代を指す。
 - イザ 2:2、ミカ 4:1・・・いずれもメシアの王国についての預言
 - (2) ユダヤ教の教師(ラビ)が使う用語でも、【メシアの時代】を意味する。
 - (3) ヘブル人への手紙で「この終わりの時」とあるのは、イエスの初臨があったので、すでに「終わりの日々」の時期に入ったという認識である。

オリーブ山での弟子たちへの教え

1. マタ 24 : 1~2 イエスが弟子たちに神殿崩壊を預言した
2. マタ 24 : 3 弟子たちがイエスに 3 つの質問をした
 - (1) 【Q-1】エルサレムの神殿崩壊はいつ起きるのか。
 - (2) 【Q-2】イエスの再臨の時には、どのような前兆があるのか。
 - (3) 【Q-3】この世の終わりには、どのような前兆があるのか。
3. マタ 24 : 4~8 イエスの回答【A-3】この世の終わりの前兆
 - (1) 24 : 4~6 この世の終わりの前兆とは言えないこと (二つ)
 - ① 偽キリストの出現
 - ② 局地的な戦争
 - (2) 24 : 7 この世の終わりの前兆 (三つ+そのほか)
 - ① 世界大戦「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がる」
 - ② 飢饉
 - ③ 地震
 - ④ ルカ 21 : 11 疫病、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆
 - (3) 24 : 8 産みの苦しみの初め
 - ① 「産みの苦しみ」とは、大患難期を指すラビ用語
 - ② その「初め」とは、前兆のこと
 - (4) 大患難期の前兆として起きることは、世界大戦、飢饉、地震、疫病などである。
4. ルカ 21 : 12~24 イエスの回答【A-1】エルサレムの神殿崩壊
 - (1) 21 : 12~19 エルサレム陥落の前に起きること=使徒たちへの迫害
 - ① ユダヤ人たちが初臨のメシアを拒否したことの延長線上にある
 - ② この時期に使徒たちの多くが殉教死することを示唆する
 - (2) 21 : 20~24 エルサレムの神殿が崩壊する前兆
 - ① エルサレムとその神殿が崩壊するのは、ユダヤ人たちが初臨のメシアを拒否したことに対する神のさばき (マタイ 12 : 31~32、22 : 7、23 : 36~38)
 - ② その前兆は、20 節「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら」

5. マタ 24 : 9~35 イエスの回答【A-2】再臨の前兆 イスラエル民族を中心に
- (1) 24 : 9~14 大患難期前半期に起きること（一部は、後半期まで続く）
 - (2) 24 : 15~27 大患難期後半期に起きること
 - (3) 24 : 29~30 イエスの再臨 その前兆は「人の子のしるし」「栄光」
 - ① 29 節で 暗黒が世界を覆う。他の預言箇所とも照らし合わせると、暗黒は、大患難期の直前に 1 回、大患難期に 4 回、計 5 回の暗黒がある。再臨前の暗黒は、第 5 番目。
 - ② 他の預言箇所とも照らし合わせると、このとき、イスラエル民族の大半は、ヨルダン川の東側の山地の町ボツラ（ペトラ）に避難している。大患難期の後半の 3 年半をこの地で神によって養われた民は、ついにイエスをメシアとして認め、民族的な救いを受ける。
 - ③ 30 節で 神の栄光が天に現れる。それが再臨の前兆である。
 - (4) 24 : 31 イスラエル民族の帰還（旧約の聖徒たちの復活を含む）
 - ① イエスの再臨によって、大患難期は終了する。
 - ② イスラエル民族の帰還を助けるために天使たちが派遣される。これは、大患難期のあと、メシア王国が始まるまでの準備期間 75 日間において起きることである。
 - ③ 「天の果てから果てまで、四方から」→（直訳）「四つの風から、天の果てから、そして、彼らの果てから」
 - 天の果てから・・・旧約の聖徒たちが復活して、約束の地に立つ
 - 彼らの果てから・・・イスラエル民族がボツラから帰還する。離散地からも（マルコ 13 : 27「地の果てから」）
 - (5) 24 : 32~35 いちじくの木のとえ
 - ① 新芽が出たら夏は近い
 - ② 「これらのことをすべて見たら」・・・特に 15 節「荒らす憎むべきものが聖なる所に立つのを見たならば」=反キリストが神殿に立つのを見たなら
 - ③ 「人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」・・・あと 3 年半で再臨
6. マタ 24 : 36~42 携挙に関する教え
- (1) 36 節の冒頭 「ただし」・・・ギリシヤ語の原語は「ペリ・デ」、話題を変えるときに使われる。訳としては、「ところで」
 - (2) 前の「いちじくの木のとえ」では、【再臨の時期は、反キリストが神殿に立つから 3 年半】と時期が予測できると教えられた。これに対して、36 節では「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。・・・ただ父だけが知っておられます」
 - (3) これは、携挙である。

- ① 携挙の特徴は、地上の教会から「ひとりを取られ、ひとりが残される」(40～41節)という状況が起きること。取られる人とは、地上から天に挙げられる人＝信者である。
- ② 携挙においては、地上の教会に対して、信者と不信者との区別が神によって明確にされる(参照 マタ 13:24～30)
- ③ 42節 教会の信者は、「自分の主がいつ来られるか、知らない」→ 携挙の時がいつかは、だれも知らない。

7. マルコ 13:33～37、マタ 24:43～25:46 再臨に関係する5つのたとえ話

- (1) ここで話題は、再び再臨に戻る。
 - ① 5つのたとえ話は、主人が帰ってきたときの措置に関すること
 - ② 主人が帰って来るとは、イエスが地上に戻る、すなわちイエスの再臨である。
- (2) 教会の信者たちは、再臨のときには、地上にはいない。彼らは再臨するイエスに同行して天から下ってくる。よって、5つのたとえ話は、教会の信者たちには関係ない。
- (3) 5つのたとえ話は、主人としもべとの関係で語られる。
 - ① しもべは、忠実なしもべと悪いしもべとに区別される。
 - ② 悪いしもべは、「外の暗やみに追い出され、そこで泣いて歯ぎしりする」(25:30)ことになる。「外の暗やみ」、「泣いて歯ぎしりする」、いずれも不信者が最終的に受けるさばきを表す用語である。
 - ③ よって、忠実なしもべとは信者、悪いしもべは不信者である。
- (4) たとえ話には、本来、その結論部分があり、その結論によってたとえ話が何を意味しているかが分かる。しかし、5つのたとえ話には、どれも結論部分がなく、単にたとえて語られる物語だけである。結論部分は、5つのたとえ話すべてに共通であり、それがマタ 25:31～46、イエスの再臨と諸国民のさばきである。
- (5) マタ 25:31 イエスの再臨
- (6) マタ 25:32～46 諸国民のさばき
 - ① さばきの対象：大患難期を生き延びて地上に残った人々全員に対して行われる。彼らが信者と不信者とに明確に区分されるさばきである。
 - ② 諸国民の中にユダヤ人は含まれない。
 - そもそも「諸国民」という用語は、ユダヤ人以外の異邦人を指す。
 - 再臨のときに、地上に残っているイスラエル民族は全員が救いを受けた信者である。よって、信者と不信者を区分するという対象にならない。
- (7) よって、5つのたとえ話は、大患難期における異邦人に対して、イエスの再臨のあとに信者と不信者とに分けられることを教えるものである。